

「スティグリッツ教授の経済教室ーグローバル経済のトピックスを読み解くー」

ジョゼフ・E・スティグリッツ(著) 藪下史郎(監訳) 藤井清美(訳)

ダイヤモンド社 2007年10月18日刊

経済論争を一刀両断

本書は2001年にノーベル経済学賞を受賞したスティグリッツがプロジェクト・シンジケートに月1回寄稿しているコラムを翻訳したものである。スティグリッツはサミュエルソンの愛弟子として有名であり、ソローやアローといったリベラル派経済学者の伝統を受け継いで、30-40歳の頃は第一級の研究論文を書き続け、研究業績が多すぎて業績審査員を泣かせたというエピソードを持つ。1993年にはクリントン政権の大統領経済諮問委員会委員になり、1995年には同委員長に就任した。さらに1997-2000年にかけては世界銀行のチーフエコノミストを務めるなど学界と政策実務を経験した本格派経済学者である。

現在でも、研究論文を発表し続けているが、その活動の重心をプロジェクト・シンジケートのコラムに移し、保守化した経済学界の中では、クルーグマンと並んでリベラル派の論客として活躍している。

本書の中では日本についてもたびたび言及しているが、主要な関心はアメリカ国内経済の問題にある。例えば、コーポレート・ガバナンス、環境政策、年金問題、金融政策、税制、中央銀行論など、我々にも参考になる論点が多く含まれている。ブッシュ大統領やその政権下での具体的な政策、そしてグリーンズパン前FRB議長に対する批判は舌鋒鋭い。評者も同意することが多いが、そこまでは個人の責任にはできないだろうと思うことまで批判の対象にし、とにかく一刀両断なのである。

長らく政策を内側から見てきた評者からすれば、スティグリッツは実務経験があるとはいえFRB議長や財務長官など本当に政策の最高責任者の立場に身をおいたことが無いだけに、経済の舵取りのために、かなりの不確実性の下で意志決定を次々に行わなければならない立場というものをどれだけ理解しているのかは疑わしいところがある。とはいえ、論争好きの経済学界の中でも、スティグリッツのような一流の理論家が本気で政策議論をすれば、批判される側も本気で議論を受けて立たなければならないという状況になる。それは、ただの意地の張り合いではなく、高度な理論と実証結果の勝負になり、いい意味で政策の改善や研究の質を高めることに貢献していることは確かである。